

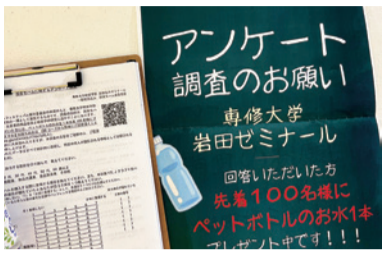
「国産生ハムサミット」「国産生ハムフェスティバル」に参加

寄稿

経営・岩田ゼミ3年次 川島浩輝 君島陸斗

経営学部・岩田弘尚ゼミは、一般社団法人国産生ハム普及協会及び生ハム工房のジャンボン・ド・ヒメキ(長野県)と産学連携し、国産生ハムの認知度向上に向けて活動している。その一環として、10月8、9日にユネスコ食文化創造都市に認定されている山形県鶴岡市で開催された「国産生ハムサミット」「国産生ハムフェスティバル2022」に参加した。

9日に開催された国産生ハムフェスティバルは、多くの方々が来場し、多くの生ハムが振る舞われ、生産者はおの製品の魅力をアピールした。そのお返しに、子どもからお年寄りまで笑顔になっていた。一方、我々の調査研究にも大きな進展があった。フェスティバルでは、来場者にアンケートを取る機会を設けてもらった。今回、国産生ハムに対する消費者行動や認知度が、ゼミの先輩が調査した19年と、どのくらい変化したのか追跡調査を実施した。すると、まだまだ認知度に課題があるということが分かり、本学



調査活動と同時に国産生ハムの魅力をPRした

産学連携 認知度向上へ調査研究

の先輩と同様「どげんかせんといかん」と思ったのである。この結果を、認知度向上のための協会への提案や、他大学と行うインタビューでの発表に生かしていきたいと思う。前日の8日に行われたサミットは、加盟する生産者のみに参加するイベントで、イタリアとビデオ通話を行い、豚熱や循環型経済といった欧州の現状と今後の国内の動向を伺った。一連の活動を通じ、何事にも完成したと思っても改善できることはたくさんあり、絶えずPDCAを循環させていく重要性を学んだ。今後、社会で求められている「GRIIT(やり抜く力)」を意識して、今回明らかになった課題に対する解決策を経営学の理論から導き出し、活動の集大成として協会に提案していきたい。



生ハムフェスティバルに参加したゼミ生

ウクライナから避難 本学で日本語を学ぶ ジンチェンコさん 佐々木学長と面談 支援に感謝伝える

ウクライナから日本に避難し、本学で日本語を学んでいるバレンティナ・ジンチェンコさんが11月28日、佐々木重人学長と面会した。「我々はできる限りの支援をします」という佐々木学長に対して、ジンチェンコさんは



ジンチェンコさん(左)と佐々木学長

日本語でお礼を述べ、「勉強やコミュニケーションの機会を与えてくれて心から感謝している」と語った。ジンチェンコさんはウクライナのクリヴィー・リフの出身。ロシアの侵攻後、今年3月に横浜に住む娘さんのもとに避難して来た。日本語を修得するため、9月から本学の「日本語・日本事情プログラム(JLIC)」の秋期コースに参加している。本学は、ウクライナ支援として、すでに日本語を学んでいる方で日本語の学修希望者を対象に、年間4コース開講している。

ジンチェンコさんは現在、他国からの留学生とともに、初級レベルの日本語を学んでいる。最初は日本語が全く話せなかったが、面談では「国際交流会館の生活はどうですか」という佐々木学長の問いかけに「とてもいいです。みんな手伝ってくれます」と述べ、学修については「難しいけれど面白い」といずれも日本語で話した。ジンチェンコさんは12月までの秋期コースに続いて1、2月の冬期コースにも参加したいと、日本語学修に意欲的だ。

菊地投手に指名あいさつ 千葉ロッテ球団関係者が来校

プロ野球ドラフト会議で千葉ロッテマリーンズから1位で指名された野球部の菊地投手(経営4)が、11月16日、球団関係者から指名あいさつを受けた。

球団側から「日本を代表する選手になることを期待している」との言葉をかけられた菊地投手は「腕を振り続けて、千葉ロッテに貢献したい」と力強く述べた。

そのあと記者会見が行われ、菊地投手は「専攻の4年間は本気で頑張りたい。これからは日本がある神奈川県伊勢原市役所を訪問し、高山松太郎市長にドラフト指名について報告した。高山市長からの激励を受けた菊地投手は「伊勢原の豊かな自然に触れながら、野球に打ち込むことができたと感謝を述べた。菊地投手は26日、千葉ロッテと契約を結んだ。背番号は28。



吉井監督のサイン入り色紙とボールに笑顔の菊地投手

同日、寮とグラウンドがある神奈川県伊勢原市役所を訪問し、高山松太郎市長にドラフト指名について報告した。高山市長からの激励を受けた菊地投手は「伊勢原の豊かな自然に触れながら、野球に打ち込むことができたと感謝を述べた。菊地投手は26日、千葉ロッテと契約を結んだ。背番号は28。

文・渡辺ゼミ&齋藤ゼミ 川崎市スポーツフェスタに協力

親子でスポーツに親しむ「川崎市スポーツフェスタ2022」が10月10日、川崎市で開かれ、文学部ジャーナル学部の渡辺英次ゼミと齋藤ゼミが協力した。スポーツ現場における身体情報の活用をテーマにしている渡辺ゼミは、体力測定用のプースを設け、専用の機械で全身反応時間を測定した。参加



オリジナルスポーツ新聞を説明する齋藤ゼミの学生

「多くの参加者に体力測定して素早くジャンプを繰り返して、学生たちは反応が速い」と話した。齋藤ゼミはオリジナルのスポーツ新聞を制作し、希望者にプレゼントした。子どもたちは、自分の写真が一面を飾った新聞を笑顔で受け取り、大切に持ち帰っていた。近藤さん(3年次)は、「コロナ禍で人と接する機会が減っているが、会場で直接会った子どもたちから元気をもらえた」と感想を述べた。

薬科さん(人間科学4)が ベストプレゼンター

人間科学部心理学科4年次の薬科佳奈さんが、「数理モデルによるパニック症の心理的介入過程のシミュレーション」において、若手の企画「学部生・高校生プレゼンバトル」でベストプレゼンターに選ばれた。薬科さんのテーマは「数理モデルによるパニック症の心理的介入過程のシミュレーション」。パニック症における認知行動モデルを数理モデル化したものを用いて、パニック症へのリラクゼーション法の作用メカニズムを検討する内容だ。薬科さんは国里愛彦教授の計算論的臨床心理学研究室に所属。計算論的アプローチについて学び、本研究に取り組んできた。今年度は29件応募があり、9月の学会でオンライン発表された。

法「租税法Ⅱ」で税務講演

国家予算から税の分類、インボイス制度まで幅広いテーマが取り上げられた講演会



法学部「租税法Ⅱ」(谷口智紀教授)の一環として11月10日、神田キャンパスで東京国税局調査第三部長の高松博和氏(昭61法)による「財政の現状と税務行政の今後について」と題した税務講演が行われた。国税庁の「税を考える週間(11~17日)」に合わせ、3年ぶりに対面方式で実施された。高松氏は最初に歳入と歳入のグラフを使い、国債償還の約23%を占めている現状を示した。後、こうした財政赤字の原因を高齢化と少子化と分析した。「国の借金はこれからも年々増え続けていく。私たちは現在、15年分の収入を借金していることになる」と話した。税の分類などに触れた後、確定申告が必要なケースなども解説。また、来年10月から実施される「インボイス制度」についても概要を説明した。